



TITLE:

日食漫談

AUTHOR(S):

宮澤, 堂

CITATION:

宮澤, 堂. 日食漫談. 天界 1929, 9(102): 453-460

ISSUE DATE:

1929-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161459>

RIGHT:

日 食 漫 談

宮 澤 堂

スマトラ地方には頭にする枕と共に抱き枕と云ふものがベツトに供へてある（スマトラ地方ばかりではないかも知れない）これが無いと向ふの人達は寝られないらしい。案外面道な人達だと思つたのはこの枕を見てからである。初めは變なものが有るなと思つて居たが、後には面道なものだも感心した。

この様な枕があるを、我々の様な總てが簡単に出来上つて居る者にはかへつて寝られなくなる、でもわざわざ置いてあるのだから何かしなければならぬと考へ付いて以來足枕をした。即ち頭に枕をすると同じ様に足に枕をするのである。そうでもないで只でさへ狭いベッドがなを狭くなる。

足枕にするに大變寝心持が良いと云ふ事を發見してからは同じ様にこの枕に就て惱んで居た稻葉さんに足枕にする事を大いにすゝめた。稻葉さんは自分と同室に居られたと云ふ事を先にこそはつて置かないと次の話が出来なくなるので一寸書いて置く。さて私はこの足枕にする事を大いにすゝめたと同時にそれ以來自分でも足枕はいゝものだと思つた。そして何時もきたない足をこの枕の上ののせて居た。

故に我々が日食が終つていよいよ日本に歸る頃には足枕は相當な色を發して居た。きつと向ふのボーイ達は日本人は何と體の汚い人種だらうと話合つた事だらう。よもや枕の上にこの大きな足がのせられて居たとは氣がつくまい。

この枕が汚れたのは何時も汚い足をのせたからばかりではない。足癖が悪いためか時々この枕を蹴落すのだつた。

こうなるに汚れないのが不思議な位である。隣に寝て居る稻葉さんも同じ様に足癖が悪い。自分と同じ位の程度で枕を蹴落すのは上手である。

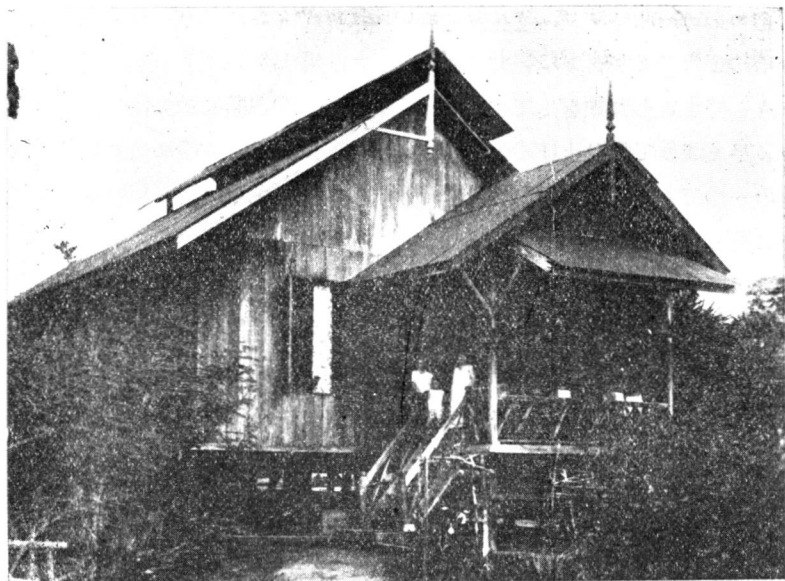
毎日々々朝起きて見るに長い四尺にも餘る枕がのび々々板間に寝て居る。然も二つとも申し合せた様に。



ペルラにある野村氏農園の景



農園に働く人々



スマトラ農園宿舎



同 上

初めの一週間ばかりはきまりが悪いので、早く起きた方が自分の枕だけを拾つてそつミベッドにのせて置く。

そしてすました顔をして本なぞ見て居るのも一週間ばかり續いたがだんだん々々早く起きて拾ひ上げるのが面道になつて来ると言ふのは最も自然な動作の一つである。ごちらから先にそうなつたかは餘り研究しない方が自分に勝味があるらしい。

こに角一週間二週間こたつに従つてお互のみにくい個性を發揮したした朝は大抵八時頃まで（こはちこひごいがこの位に書かぬこ面白味がなくなる）。寢て居る勿論足癖は板間の上でのびのびして居るのは何時もの事である目がさめて枕が落ちて居るのを知つて居てもたゞでは拾はうこしない位になつたのは三週間も過ぎた頃だらうか、やつぱり二人共神様には生れなかつた。最も平凡な人間らしい人間に生れて來たのだなこ悟つたのはこの枕の事件からである。

そんな様な平凡な日が一日一日こ重つていよいよ五月九日こ云ふ恐い様な又愉快を感じる日が來た。その日も同じ様に朝から始まつた。朝こ書いたらこれを讀む諸君は直ちに枕を聯想するであらう。そしてこの日の枕の安否を聞きたいであらうこ思ふのは誰でもない、この自分である。又自分こしてもこれを書かなければ今迄書いて來た枕に就ての論が何にもなくなる様に考へられるのである。

實の所この五月九日の朝に枕を蹴落して居るのを見たなら其の日の日食觀測は何かのためにさまたけられるこ云ふ何の根據もないうらないをしたのだつた。

でも相變らずに枕は落ちて居た然も今日だけは御丁寧に蹴かたがひきかつたこ見えて枕はまがりくねつて居る。

これでは今日の日食觀測はこてもむつかしいこ心配になつた。

さうせ觀測が出来ないのなら半曇りなごにならずに雨がざアざア降つてしまへば良いこ云ふ様なやけくそになる。

こんな氣持になつて居てもまだいぢらしい所がある。そつミ天氣模様を見てやらう云ふ氣が起つたからだ。

枕はそれなりにして置いて北側の窓のすきから空をのぞいたが曇つて居る。確かに曇りだ然も雨が降りそうだ。さうせ曇だこは思つて居たんだから仕方がないさあきらめ切れない氣持がもつこ寝てやれこ云ふ氣持を盛んに起させる。板間の上ところが居る長い奴には手をふれるのもいやだ

こんな事なら常に心がけて足枕をなをして置けばよかつたこ、さすがに足が根めしくなつて足を見下した。毛だらけの大きな足が二本ニューこ所在なさに立つて居る。自分の足こは思はれない。

人間の氣持は一刻一刻變るのは今始まつた事ではない。私はもう一度空模様を見やうこ決心した。今見たのはドアのすき間からだつた。ここによるこ見た其の部分だけが曇つて居たのかも知れないこ云ふもつこもらしい考へが急に出て來て其の氣持が私の手に依つてドアを強くあげさせた。この様な萬一を願ふ様なまきに大抵の場合萬一がはずれるのは面白い位に當るこ云ふ恐れは充分自分知つて居た。

やつぱり曇りだ!!! 思つた通りだこ云ふ氣が起つた。すぐ後には裏切られたこいふ氣持に變つた。全々反對な氣持が殆ど同時に起るこ云ふのは人間の心だけが出来る藝當らしい。

こんな事なら、心の中だけで曇つて居るんだこ決めて居て不安の中にもいちろの望みをもつて居た方がが實際曇つて居るのを見てしまふよりごんなに心が安らかゝ知れないこ益々落ちた枕が目につく。

そして窓のすき間から見て曇つて居るのだこ決めて居た方がよかつたこ思つても今こなつては始まらない。

「だき枕」こ云ふ奴はさうも印象が悪い。それでこんなに枕に就て書きなぐつた次第。

腹がすいて居ても思ふ様に食事が喉を通らないが、無理に入れて觀測所に出かけたのは何時も出かけるより一時間も早い八時だつた。

さうも空具合が悪いのこ腹具合がおかしいのこが共同して、今日は日食が起るんだこは思へなくなつて來たのは妙だ。

でも確かにあるに違ひはないこも考へられる。頭具合まで妙になつて來た。でも山の上の觀測所に来てやつこ今日は日食があるんだこ意識がはつ

きりして來た。それは觀測所の兩側の空地にベンチが四つ五つならべられて、そこには日食を觀に來る人があるのだと聞いたからであつた。

自分の體が自分のものでない様だ。大分上つて居たらしい。

皆、山に昇つて來たが顔がはつきりして居ない。でも口だけは“今日は大丈夫晴れる”と云つて居る。意志があつて云つて居るのではなくて、口だけが勝手に何者かに云はされて居ると云ふ形である。

そんな事を口にだけでも出す事に依つて自分自身の失望をなぐさめて居るのだと氣付いた。

頭の中がキーンと鳴つた様だつた。そして涙が出そうになつた。

或る尊いものを感じたからだつた。

時がたつた。従つて天氣模様は良くなつて來た。太陽の顔も時々雲間から見られる様になつて來た頃は“晴れる！ 大丈夫だ”と云ふに元氣が出て來た。

この豫感は的中した。我々はファースト・コンタクトを完全に觀測する事が出來た。もう大丈夫だと皆が晝食を食べ初めたのはまだ十二時になつて居なかつた様に記憶して居る。山の様に積まれたむすびは皆の口へ愉快な様に跳び込んで行く。「うまいうまい、こんなむすびは内地に居る者にはとても味はれないものだ」と云ふと少し大げさかも知れないが……

自分は太分食べ過ぎてしまつた。

食事中に太陽は大分かけた。面白いながめだ。丁度戰鬪準備と云つた様な有様、もう一時もたてば太陽めがけて鐵砲を打つのではなくてシャッターを切るのである。然も五分間の間に勝負は決る。我々の様な氣の短いものにまつては手頃な戰爭とも思はれる。食事も終つて早速練習を始める。山本先生の Go と云ふ聲がするミボタンボタンミシャッターを切る音が始まる。時計係が 0.1, 0.2 と讀む。まるでフォードの自動車に三輪車の車をつけて走つて居る車の中で柔道のおさへこみが初まつた様な騒ぎだと云ひたいが案外聲の出ない騒がしさである。

皆一生懸命だつた。

この頃からそろそろ雲が出始めて、私は元の失望に歸つた。

もうこてもだめだと思つた時に大きな聲で泣き出してやりたい様な衝動にかられた。いよいよ時は近づく。雲は増々濃密になる。こても浮ぶ瀬はない。

“曇つても豫定通りやる!!” 山本先生は悲痛な聲を出した。

こんな時には是が非でも成功して見たいのは人情の常である。

次第に暗くなつて來た。太陽の光つた部分が二日月の様に細くなつて、しばらくしてから西の方から冷しい風が吹いて來たなと思ふや否や急に西の山が暗くなつたと同時に、我々の觀測所を影が非常な速度で通過したので、自分は少からず驚いた。タイマーが時計面を読む事が出来るだらうかと思つた位に暗くなつた。

美しい銀白色のコロナを雲越しに見る事が出來たのは愉快な事だつた。

地平線近くは眞の暗黃色をなして、すごい事この上ない。

この暗い影の中で各國の天文學者が働き續けて居るのであるが其れもたつた五分間の間である。他の人から見たら確かに氣狂沙汰に相違あるまい。

後で聞いた事ではあるが、この日食中、森で木を切つて居た土人共は夜が來たんだと思つて皆家に歸つたとか。

さて自分もコロナのスペクトルの寫眞を撮つたのであるが、さうも結果が良くない様な氣がする。萬一失敗したらと思ふ不案が出て來た。さうも足が地に付いて居らない様な氣がしてならない。

食が終つて後萬歳を三唱したのは堪らない愉快を感じたからである。又食事をやり出したが、あまりあわてた爲か鼻に飯粒が入つて長い事困つた。

日の丸の旗を作つて觀測所の屋根に立てたのは自分だつた。まるで小供の様な氣分になつて居た。三時頃から早速觀測所を破り初めたが、この頃には太陽がかんかん照りつけて、暑い事おびたゞしい。

世の中と思ふものはこんな風に出來て居るものですよ。

夜は徹夜して寫眞を現象したが、自分のは案の通り失敗だつた。これも器械にいゝ加減な細工をしたたまものである。

この様な大事な場合につまらない細工をするのは實際愚の到りだと思つ

でも仕方がない。何かの方法に依つて諦めるより他に仕方がない。

自分は生來餘り思ひ切りの良い方ではないので、こんな場合には何時も長い事悩まされる。今度もそうだった。(終り。)

彗星界の近況

過去三四年間、毎年可なり賑はしかつた彗星界も、さうした故か、今年は、今までの状況から見るに非常に淋しい。本年に入つて発見された新彗星はシブスマンワクマン兩氏の 1929a といふ彗星ばかり。(「天界」第96號第205頁)。之れも春以來は見えなくなつた。「年鑑」等の豫告によると、今年はダニエル、ペライン、メトカーフ等の彗星が歸來する筈であつて、其の中でも最も興味深く期待されてゐるペライン彗星の近日點通過は七月末であるのに、未だ何の発見も報ぜられない。まさかクリブス氏の計算に誤りがあるとも思はれないが。

去る四月末にロンドンで開かれた大英天文協會(B. A. A.)の例會に於いて、クロンメリン老の言ふ所に據るに、近頃クリブス氏は第一ジャコビニ彗星(1896年第五彗星)の軌道や攝動を新しく計算し、之れが本年九月に近日點へ歸來するこゝを知つたといふ。氏の計算結果は

	1896年の軌道	今1925年の軌道
近日點通過の日	1896年十月28日0313	1929年九月24日75
近日點の引數	140° 31' 45"	142° 25' 41"
昇度點の黃經	193 25 34	192 34 15
軌道面の傾斜	11 21 43	11 52 47
離心角	36 2 57	73 3 6
公轉週期	6年64628	6年43405

之れによると、八九月頃は「へびつかひ座」から「へび座」を通りぬけて「わし座」あたりにある筈であつて、觀測には誠に好位置である。地球に最も近いのは八月末らしい。誰か之れを発見する人は?

尙ほ、クリブス氏の最近の計算によれば、本年出現の筈であつたダニエル彗星(1907第四)は來年四月に近日點を通過するこゝになつたといふ。

(八月五日山本)